



2019/4/1 No.80

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

ひとりの命を大切に



理事長 木下 宣世



二〇一九年度の歩みが始まりました。過ぐる一年のお祈りと御支援を心から感謝し、御礼申し上げます。新しい年度も私共の歩みをおぼえ御指導、御支援下さるようお願い申し上げます。

さて、先般私共の心を痛める出来事が起こりました。野田市に住む小学校四年生の女児が父親の虐待により亡くなられたことです。この事件についてマスコミはかなり長期にわたり、詳しい報道を続けました。何とかこの子を救えなかったのかというところで、児童相談所、県、市等担当部署の不手際が指摘されました。この事件が報道される度に言葉に出せないような重苦しい気持ちになりました。

親は何があっても子を守る、それは親の務めとか義務である以上に、本能的に授かっているものだと思っていました。ところが親が子をその手で虐待して死に至らしめる。どうしてか理解しかねる思いがしたのです。親の側によほどの屈折、ゆがみ、ストレスがあってその心を狂わしてしまったのでしょうか。考えてみれば今回の事件だけではありません。これまでも、そしてこの出来事の後からも虐待に関する報道は後を絶ちません。

また虐待以外にも、理解できないような殺

人事件が次々と起きている状況です。エフェソ書の中に「今は悪い時代なのです」という言葉がありますが、まさに今日の社会にも当てはまるものではないかと思えます。多くの人の心が満たされていない。不安、恐れ、焦燥、不満に支配されている。そこからねたみ、怒り、敵意のようなものが生じているのではないのでしょうか。

今回の出来事は福祉に携わる私共にとっては決して他人事ではありません。今日のような人の命がおろそかにされる社会状況にあって私共はどうしたらよいのか考えさせられます。結局のところ福祉の現場で一人の人を大切にしていくことではないかと思えます。世の中の風潮を一気に変えることは困難でしょう。けれどもその風潮に抗して人間の命を大切にしていくなかで業を積み重ねていく以外にはないと思います。

さて、思わず最近考えさせられていることについて長く書いてしまいました。が、新年度望みの門全体で取り組む大きな計画について報告致します。それは「望みの門学園」新築計画です。これは次年度にまたがって行われますが、このための補助金が行くとの通達を県から受けました。法人としてはこの際「デイサービス」やその他の働きも含めた建物にしようと考えております。まだ始まったばかりの話で、今後さらに詳しい報告がなされると思います。いずれにしても多額な費用がかかる事柄です。無事完成に至るよう御加禱、御支援の程よろしくお願い申し上げます。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

「マナの家」の日常を振り返って

元職員 水野 直理

去年の九月末で「マナの家」を退職しましたが、あれからもう五ヶ月が経ちました。膝の不調のため辞めることになりましたが、関わりを持った利用者たちの顔や名前が思い浮かび、今どうしているのか気にかかります。

今回は四年半の「マナの家」での日々を振り返りながら、思い出すままに書いてみたいと思います。宿直は最後まで緊張感がありましたが、夕食後の時間はできるだけ利用者と関わろうと努めました。そっとしておいてほしい利用者と関わりを持ちたい利用者の見極めが難しいのですが「アイスください」とか「バンドエイドください」などと言ってきた時、「そのアイスが好きなの?」とか「どうしたの?」など、たわいない声かけがきっかけで話が発展することがあります。何か飲みたいと言う寮生に「ココア作ってあげようか?」と尋ねると、とても喜び、他の利用者も一緒にココアを飲んだことがありました。

またケーキがある時など、紅茶を入れて居間で楽しい時を過ごしたこともありました。食べた皿などは各自が洗いますが、その時は「私が洗ってあげる」というと、想像以上の喜びようで、みんな上機嫌でした。立ち仕事のバイトで足がむくんだ利用者の足を

マッサージしながらおしゃべりしたり、愚痴を聞いたり、一緒にTVを観たりなど、消灯前の時間を共有する楽しさは忘れられません。反発や無視されたりなど大変なこともありましたが、それも含めて、利用者たちとの関わりは得難いものでした。



「マナの家」に来る理由は千差万別ですが、その根底に「人間不信」があると云ったら大袈裟でしょうか。子どもたちの生育歴を知るにつれ、親から受ける愛情の量が絶対的に不足していると感じますし、親から十分なケアをされていないという不安全感はそう簡単には埋められないものなのでしょう。

それでも縁あって「マナの家」にきた利用者たちがここを足掛かりにして信頼感や愛情の大切さを学んでいってほしいと切に願うものです。

婦人保護施設 望みの門学園

新年度にあたり



園長 田尻 隆

古今東西、悪口にもいろいろあります。今どきの小学生はキレると平気で「死ね、消え

ろ。」と吐き捨てるそうです。短い言葉に込められた圧倒的な憎しみと、他者に対する徹底的な無関心を感じざるを得ません。私が小学生のころはよく「バカカバカバチンドン屋、お前の母ちゃんデベソ」などと言っていました。こちらはまだ相手の母親のことを気に留めている分ましなのかもしれません。あれから四〇年…。今では学園の皆さんからよく悪口を頂戴していますが、これは間違いなく私に対する愛情表現なのだと思えて取っています。「ジジイ!ハゲ!」に対しては「ジジイでもないし、ハゲでもないし。」と切り返します。すると「どうせすぐハゲんだろ!」と近い将来の頭皮の状態まで心配して下さるのです。また最近の秀逸な?悪口に「さっさと火葬場行け!」というものがあります。これは「さっさと死ね!」のアップ系で、なんと死んだ後のことまで気にかけて下さっているのです。思わず膝を叩き、座布団を差し上げたくまりました。

そのような日々の積み重ねの中から、皆さんには色々と不便をかけてしまい、ストレスも随分溜まっているのだらうなと実感させられています。実際、築三十八年が経過した建物は居室が狭く、プライバシーも十分確保されているとは言えません。そこで長年の願いであった「全面改築工事」の協議を昨年度県の担当課と進めてきました。その結果、先の理事会において正式に望みの門学園の建て替えについての承認を頂き、二年後の完成を目指し歩

み出すこととなりました。まさに学園にとって新たな希望が与えられたことになります。

昨年末、天に召された義父の愛唱聖句は箴言の「人の心には多くの計らいがある。しかし主のみ旨のみが実現する。」という言葉です。私はこの聖句を二〇一九年の学園の年間標語としました。今後、様々な皆さまのお力をお借りし、新施設建設に向けあったけの知恵を絞っていくこととなります。しかしながらそこで最も大切なことは、人の多くの計らいではなく、神さまのみ旨が実現するよう祈り求めていくことだと思います。望みの門の創設者木下ドーラは、戦後混乱期の日本における困難を抱えた女性を憂い、我が事として隣人となるべくドイツから駆け付け救済活動を始めました。その働きは究極のアウトリーチと言ってよいでしょう。しかし彼女は決して人の力のみ

に頼ることなく、常に神さまのみ旨を尋ね求めたのでした。その結果この富津の地に婦人保護施設を立ち上げることが許されたのです。



「上品な女性」

めて望みの門の創立の精神に立ち返り、謙虚に主のみ旨が実現するよう祈り求めていくことです。

もちろん悪口からは卒業し、上品な女性の立ち振る舞いを学ぶことは喫緊の課題であります。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

三十年間を振り返って

支援員 在原 礼子

元号が昭和から平成に替わり、間もなくして望みの門に入職しました。

今年の五月に新年号に変わります。今思うとあつと言う間の三十年間でした。

振り返ってみますと始めは福祉がなんであるかも分からず、ただ先輩の職員について利用者さんのお世話をさせて貰いました。もともと人との関わりが好きであつたせいもあり、楽しいと感じることが多かったことを覚えていてます。ですが慣れてくると、利用者さんとの関わり方が逆に難しいと感じ悩むことも多かったです。そんな時は先輩の職員に相談しアドバイスをもらい、またがんばろうと思ひました。ついこの間、その時一緒に働いていた先輩から、何年ぶりかで電話を貰い懐かしく、当時の利用者さんの名前や、職員の名前エピソードがポンポン出てきてついつい長電話になってしまいました。

現在は、古巣の養護老人ホーム望みの門楽

生園に戻ってきて一年経ちました。楽生園に戻ってきた当初は、以前の楽生園とは、職員も利用者さんも替わっているのだから当然のことですが、雰囲気が変わっていて随分戸惑いました。暫く介護の現場を離れていたこともあり、慣れるまでは大変でした。

楽生園に戻る十二年間は特別養護老人ホームの紫苑荘の介護員・ホームヘルプサービスの提供責任者・デイサービスセンターの介護員・在宅サービスで介護支援専門員を経験させて頂き、とても有意義でした。望みの門は、総合福祉施設として様々な分野で地域福祉として展開し、職員は、異動する機会もあり不安を感じる職員も多いと思いますが、福祉に関して幅広く経験でき自分自身にとって成長できるチャンスでもあるのではないかと前向きに私自身は考えております。私は今迄経験してきたことは、人生において何一つ無駄なことはないと思っています。いつかその経験してきたことが、必ず役に立つことがあると信じています。

その経験を生かし、今後も利用者さんが穏やかで生き甲斐を持って生活でき、職員が、愛を持ってそのお手伝いが出来たら幸せだと思っています。



特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

わたしらしく・・・



生活相談員 萩野 恵

昨年三月に紫苑荘の生活相談員に着任し早一年が経過しました。不安だらけの日々でしたが色々な方々に助けをもらい今日までできました。相談員として働き八年が経ちますが日々勉強です。その中で思うこと「相談員とは…」です。生活相談員とは利用者様やご家族様・介護支援専門員・行政など多くの人の関りがあり簡単に言えば施設の窓口的な存在なので相談員はこうでなければいけない、こうしなければいけないと叩き込まれてきました。高い理想像で囲まれている職種。でも私らしくやりたいと思っても願いは叶わず…模索する毎日、空回りする毎日でした。仕事に行くのも嫌になった時期もありました。そんな時に、ふっと考えた事。誰のために相談員として働くのか、何のために頑張るのか。答えはすぐ出ました。誰のためか毎日楽しく過ごしているご利用者様の笑顔が見たいから、何のためか自分自身のため・我が子のため…。

忘れていた事、一番大事な事を思い出し何が吹っ切れて「やっぱり…わたしはわたし。わたしらしくやろう！」と仕事への思いがどんどん溢れてきました。介護とは相談員とは介護支援専門員とは看護とは…それぞれ

業務内容は違うけれど老人福祉には欠かせない存在であり一人でも欠けたら崩れてしまいます。生活相談員は施設の基盤を作る・支える。その上で介護・看護・介護支援専門員・

栄養士が一丸となりご利用者様が毎日楽しく過ごせるように。毎日笑って過ごせるように、美味しいご飯が食べられるよう、職員全員が毎日楽しく笑って仕事が出来るように舞台を築き上げていく。そんな施設を紫苑荘のみんなで作りに上げていきたい。そのためにはしっかりと地に足を着けみんなを支えられる存在でありたい、もっともっと勉強をして知識を向上させたい。色々な目標が出来てやっぱりこの仕事が好きで、この仕事を選んでよかったと心から思います。これからわたしらしく頑張ります！



特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里

富士見の里と私

介護員 白井 政子

柔らかな春風に心華やぐ季節を迎え桜の便りが次々に聞かれるこの折、皆様仕事に励ん

でおられる事と思います。富士見の里も開設七年が経とうとしています。さて私事ではありますがのぞみ会に入職した理由は以前働いていた施設の先輩がのぞみ会で介護員をしており「近いうちに上総湊に特養が出来るから自宅からも近いし入ってみたらどうか」と言われその頃私は他の介護施設で働いていました。ほぼ同じ頃湊地区に回覧板で開設をするという内容の文書を読み確実なんだと実感しました。こんな近いところに施設ができると思い迷うことなく面接を受けさせていただき平成二十三年七月一日より紫苑荘へ配属となり一年間お世話になりました。まず驚いたのは複合施設だという事でした。第一種社会福祉施設七か所、第二種社会福祉施設十二事業所、他にも福祉学校など九事業所が存在するとの事で他業種、多彩な施設があり幅広く運営しておりそれに携わっている多くの職員がいるので改めて社会に貢献している施設だと思いました。紫苑荘から富士見の里へ。立ち上げはすべてが一からのスタートなのでとても大変でしたがやりがいがありました。そして様々な積み重ねがあり現在に至っています。富士見の里が設立するまでは方舟乳児園やかずさの里も知りませんでした。がまさに「ゆりかごから墓場まで」という言葉そのものだと思いました。これから超高齢者社会を迎え介護現場も人材不足等様々な問題も出てきてとても深刻な状況であり私達の行く末もととても不安になります。要介護認定者数はこの

十二年間で約二倍以上も増えさらに十年後には高齢者が八百万人を超えると言われています。まずは人材確保と育成が必要になります。高齢者が増える事により福祉サービスを担う人材も必要となりますが需要に比べて全くと言っていい程足りていないのが現状です。

少子高齢化社会で介護、福祉サービスはニーズが高まってきており介護士は社会から必要とされる職業には間違いないです。上総湊に施設が増える事で地域の活性化に繋がると思うと何か自分にも出来る事があると考え職員増員の為に地域の方々に声掛けをし、数名の方が入職されています。又、行事に於いては昔お世話になった学校の先生や地元の方々にも協力して頂いています。あと市役所などにも足を運び富士市のボランティアサークル等検索したり様々な方面からも富士見の里を知ってもらう機会を作っています。介護の仕事はストレスも溜まりますが三階から見える富士山と海の景色は絵ハガキに書いたように美しく最高です。以前入居者様の知人の方が面会に来られた際「この施設からこんな景色が見られるとはびっくりした。これから先の為に予約し



ておくよ」と絶賛されていた言葉がずっと脳裏に残っています。又、夜景も横須賀の光々とした明かりが一日の疲れをホッと和ませてくれたりもします。そんな環境の良い施設で働かせて頂けることに感謝しています。皆さんもぜひ遊びに来てください。私は富士見の里が大好きです。

老人サービス事業 望みの門デイサービスセンター

これからのデイサービス

介護員 安藤 佳子

年号が新たに変わり、のぞみ会に入社して四度目の春を迎えました。高齢社会と言われる現代にてデイサービスセンターに勤務していると、他の介護事業所が何カ所か閉業した、新しくリハビリ型デイサービスセンターができた、等という話を最近耳にするようになりました。お客様が自ら選択しサービスの利用を決めていく中で、いかに事業を継続し、お客様を獲得していくことがデイサービスセンターの課題なのかなとぼんやりと考えるようになりました。そんなぼんやりな私が介護の仕事をしている上で大切にしている事があります。それは、デイサービスセンターがご利用者の「居場所」になる事です。

独居のご利用者が「デイでごはんを食べさせてもらって、大きな風呂に入ると足の痛みもよくなるからありがてえよ」と話してください。たり、家族と同居している方から「家では何も

することがないけど、デイにきたら手伝いの仕事があるし、近所の同世代の人とおしゃべりができるからデイに行くことが楽しみ」と言われた時は本当に嬉しかったです。職員という立場の前に、ご本人が必要とされている場所にいる私自身も必要とされているのだと感じ、それが私の大きな原動力となっています。だから私にとっても望みの門デイサービスセンターは一つの居場所なのだと思います。今後も社会の変化に応じて福祉のニーズも多様化し、それに柔軟に対応できることが必要になるのは明らかです。そのためには施設長、相談員、看護師、介護職員、非常勤職員が話し合いを重ね、連携とチームワークで「自分たちが年を取った時に行きたいデイサービスセンター」をみんなで作り上げていきたいです。



訪問看護ステーション 望みの門訪問看護ステーション

できないこと・不自由なことが残ったとしても

理学療法士 中山 雄策

あるパラリンピック選手の言葉があります。「僕は自分の足ではもう二度と全力で走れ



昔からの暮らしや人間関係の一部を取り戻すという意味では「再構築」

ないし、それは悔しい。けれど健常者が全力疾走で得る以上の感動を得る方法がある事に気付けた事が、僕がスポーツを続ける理由なんだよ」

病気や障害により一旦家庭に閉じこもっていた人が、再び地域とつながった暮らしを取り戻すことは、以前と全く同じ関わり方を復活するというものではありません。多くの場合は「できなくなったこと」「不自由なこと」が厳然と残っています。本人や家族にとって、喪失感や失望や不便が強く意識されることは避けられません。

そのような状態を受け入れながら新しい生活を始めるには、様々な心の葛藤があり、それを乗り越える時間も必要となります。こうした本人や家族の心を療法師はどのように受け止めるべきでしょうか。

本人、家族や療法師がどれほど精一杯の努力をしても、病気や障害そのものを全て解消することは通常は期待できません。しかし人は、できない事が失った事があったとしても、生活のなかに新しい喜びをみつけた事です。それをよりどころにして、自分の存在を肯定し病気や障害を受け入れ、そこから新しい生きがいを見つけたい事でもできます。

といえることもあるかと思っています。同時に新しい関係や生活の「創造」という側面もあります。

このような暮らしと生きがいの再構築と創造を支え、単なる機能訓練の出前でなく、その人の生活を支援していく訪問リハビリテーションの実践を行う事が、療法師の仕事の究極の目標ではないかと日々考えています。これからも、要介護者本人の心身状態だけでなく、その人の生活を広い視野で捉えていけるよう尽力していきたいと思っています。

居宅老人介護 望みの門ホームヘルプサービス

地域とのつながりを大切に…

訪問介護員 小柴 美芳

桜の季節と共に、この度四月から常勤職員として入職させていただきました。

富津市に嫁いで十七年が経ちました。すっかり富津弁に馴染んでしまいました。富津の地がきつと肌に合うのでしょうか。

望みの門との出会いは、夫の祖母が紫苑荘でお世話になっていた九年前です。とても手厚く支援していただき、そのお姿を見て介護職員になりたいと思い、資格を取りました。

他所のデイサービスや訪問介護事業所での経験を経て、二年前より望みの門ホームヘルプサービスの非常勤訪問介護職員として働かせていただいております。四月から気持ちを新たに精一杯頑張りたいと思っています。

訪問介護

護は様々な出会いがあります。利用者様、ご家族、親族の方との



の談話から、それぞれのお気持ちを察することもあります。利用者様はヘルパーの私たちにいつも感謝の言葉を掛けてくださいます。『ありがとう』という言葉は魔法の言葉、こちらでも利用者様に感謝の気持ちです。

訪問介護という仕事が好きなのですが一番大変だと思うことは、道を覚えることです。方向音痴で心配性な私に『大丈夫よ』『待ってるよ』と利用者様は温かく迎え入れてくださいます。又、支援先のご近所の方から『おはよう』『お疲れ様』と声掛けしていただくこともあります。この地域の方は、とても気さくな明るい方々ばかりで元気をもらいます。支援の中で学ぶことが多く、人生の先輩である利用者様方との会話はとても貴重です。

まだまだヘルパーとしては勉強することばかりですが、頼もしい先輩方の胸をお借りして、日々精進したいと思っています。

独居の方が多く、ご自宅でお暮しになりたという方が増えています。住み慣れた地で余生を過ごしたいという気持ちに寄り添って、この地域の方々の自分らしく暮らせるお

手伝いと、安心安全に留意して勤めてまいりたいと思います。

居宅介護支援事業者 望みの門在宅サービスセンター 住み慣れた地域で 最期まで暮らすために

介護支援専門員 尾崎 睦子

在宅サービスセンターでは、要介護状態となられ介護保険サービスが必要な高齢者の方にサービス計画書を作成し、サービス提供がスムーズに行えるよう各サービス事業所と連絡・調整を図る仕事を行っています。富津市での六十五歳以上の高齢化率は毎年増え続け平成三十年度では、富津市の人口四五一六九人の内六十五歳以上は一六三一一人で高齢化率は三六・一％（日三十高齢者人口一千葉県）日二十九年度の六十五歳以上は一六一四八人で高齢化率は三十五・三％で、一年間に〇・八％上昇しています。団塊の世代が七十五歳以上となる平成三十七年（二〇二五年）には、富津市の人口が四万人に減る一方、六十五歳以上の高齢者人口一五七六〇人を見込んでおり、高齢化率も三十八・九％と増える見込みです。（第七期富津市介護保険事業計画）急速に進む少子高齢化の中で、高齢者



が重度な要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続ける事が出来る様、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるシステムとして「地域包括ケアシステム」が構築されました。望みの門においても、地域包括支援センターを中心に訪問看護・介護・デイサービス・ショートステイサービス等が地域で暮らす要介護の方々を支えとなっています。又医療を必要とする高齢者が、最期を我が家で過ごしたいと意向を示されたとき「医療と介護における連携」がスムーズに行えるよう、連絡・調整を行うのも私たち介護支援専門員の仕事です。在宅医療において、訪問看護はとても重要な存在となります。その一方で、独居老人や老老介護の増加、核家族化による介護者の不在等、在宅生活を続ける上で欠かせない家族の存在は年々弱まりつつあるように思えます。今後在宅生活の推進が予測される中、住み慣れた我が家で最期まで暮らしたいという意向やそれを支える家族により添えるよう、自分を磨いていきたいと思っています。

就労継続支援事業 望みの門新生舎 新生舎開設二十周年を 迎えるにあたり

サービス管理責任者 渡邊 宏子

一九九九年四月、知的障害者通所授産施設としてわずか三名でスタートした新生舎ですが、法律の改正や事業所形態の変遷もあり、

現在は就労継続支援B型事業所として定員四十名の大所帯となりました。

新生舎は法人の様々な事業所の中でも取り分け地域との関わりが多く、パンやクッキーの販売、米作りなどを通して広く地域の方の「のぞみ会」を知って頂く一役を担っていると自負しております。毎日忙しい中でも利用者様の元気に活動される姿に、私たち職員も「共に頑張る仲間」として楽しく過ごさせていただいておりますし「地域と共に」といった活動は今後も力を入れていきたいと考えております。

振り返るとこの二十年という月日は、利用者様を取り巻く環境を大きく変化させた時間でもあります。ご本人の加齢に伴い体力の低下、健康面への配慮を必要とし作業支援の在り方を検討する必要が出て参りました。また、利用者様を支えるご家庭でも親・兄弟の高齢化や他界といったことで家庭生活へのサポートも必要となってきました。開



平成31年3月9日 J.A.味噌会さだもと店七周年記念式典にて富津市の中から優良店舗として表彰されました。みんな毎日とても頑張った成果です。

設二十周年を迎える本年度は新生舎の取り組み自体を再検討し具体的に組み組んで行く年度となると言えます。

また、利用者様の支援にあたっては個々のニーズや能力にあった活動の住み分けを検討し、「親なき後の生活」までを考えながらサポート体制を構築すること、就労事業にあたっては、就労支援事業所は工賃の支払いが課せられていることから、「高品質・高収入」を目指せるものに特化した作業種の研究・見直しなど整理していく一年となります。いずれにせよ、大きな転換期を迎えることになるであろう二十周年も、ご利用頂いている皆様にとって毎日を笑顔で過ごせ、活力に満ちた事業所でありたいと願っています。

共同生活援助事業 グレースホーム

私が考えるグレースホームの地域における役割と、これからの在り方

施設長 白鳥 尋子

グループホームの制度は「知的障害の人たちが人間として当たり前の暮らしを実現すること」を唯一の目的とし、理念の根底には、ノーマライゼーションの思想が指す「地域での普通の暮らしの実現」として三十年前に誕生した未熟な状態から始まり、検討に検討を重ね現在の制度が成り立っております。

グループホームに入所している利用者の大半は要望の声を上げるのは得意ではありません。だからと言って要望が無いわけではなく、

自分の望みが何かもわからない事も多いようです。だからこそ、携わる私達は、表に出ていない潜在需要に応えるように心掛けていく必要があります。

また、高齢化の時代。グループホームにもその波は否めず、入居者の高齢化・地域では親亡き後の問題が大きく取り上げられております。これからは、グレースホームも利用者の状態により終の棲家を本人と共に考える事が増える事でしょう。また今出来る事は閉ざされた施設では無く、地域との関わり、連携を密にとり、見学・体験を通し、障害者本人やその御家族にグループホームを知っていただくことが重要ではないかと考え、空所中の短期入所の受け入れを昨年度より開始しました。これにより、家庭からの利用者の出入りに関し、私

を含め職員全体の更なる質の向上を目指す必要性を感じ新たに課題が一つ増えた二〇一九年度のスタートとなります。

一番は利用者・障害者本人の意思を尊重すること

第1・第4グレースホーム



第2グレースホーム



第3グレースホーム



あり、その上で取り巻く周囲の人々が安心して力になれるようにしていかななくてはならないと考えております。

※見学等をご希望の際は事前にお電話をお願いします。

地域活動支援センター 望みの門ヨカデイサービスセンター

金曜日のお楽しみ



管理者 三幣 知子

各施設毎日のプログラム、週のプログラムというのが決まっていると思いますが、ヨカデイでは金曜日の午後はカラオケの日となっています。金曜日が近づいてくると利用者さん達から「もうすぐカラオケの日だね。」という言葉が出てくるほど皆さん楽しみにしています。カラオケが始まるとそれぞれが好きな曲、得意な曲と次々に歌っていきます。利用者さんの得意なジャンルは昭和歌謡に演歌。私もそれなりに知っているつもりでしたが皆さんいろいろな曲を良く知ってらっしゃる。利用者さんによっては新しい曲を覚えていからと何度も練習する方もいらっしゃる。まだまだ意欲的です。皆さんの要望に応えるため曲数もできるだけ増やしてはいますがやり限度があり「○○が歌いたい。」「○○は入ってる?」などの声が聞かれ、昨年カラオケボックスに初めて行ってきました。行事が発表されると皆さん目を輝かせ「なに歌おう。」「○○さんの歌はあるかな。」など当日まで話題

が絶えませんでした。行事当日は定番の曲を歌う人もいれば新曲を披露する人など普段とはまた違った盛り上がりがあり楽しい時間でした。大きな声を出す

ことはストレス解消になります。それが楽しみながらできれば更にいい事だと思います。皆さんの健康のためにも週一回のカラオケ続けていきましょう。また、カラオケボックスでも盛り上がりたいですね。



千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット

相談支援員 榎本八重子

千葉県単独事業の中核地域生活支援センター(以下、中核センター)君津ふくしネットは、「誰もがありのままにその人らしく暮らすことができる地域社会づくり」を趣旨とし、総合相談支援事業を展開してきました。今年十月には十五年目を迎えことになりました。国の総合相談事業動向では、地域共生社会の実現を目指し、二〇二〇年当初を目標に市町村における包括的相談支援体制等の強化を図ることを、今後の福祉施策の柱としてい

ます。改正社会福祉法でも、住民に身近な市町村が相談支援体制を整備すると謳われています。今後、市町村相談支援体制が整備されていけば、現中核センター業務と重複するところもあるため、中核センターの役割は減少していくものと予想されます。近年、市町村は分野別福祉相談支援体制の充実が図られました。地域共生社会の推進では、国は中核センター事業をモデルに、市町村相談支援体制の整備を進めるとしています。中核センター事業県主管課のアンケート、事例分析の結果では、窓口につながる相談像と相談ニーズが市町村の認識と差があることがわかりました。地域の総合相談窓口は住民に近い市町村が担っていくことを前提に、君津ふくしネットは、中核センター事業実施要綱の事業内容を遵守しながらも、制度の狭間や複合的な課題を抱えながら市町村窓口につながらない等、市町村対応ができない相談を引き続き展開し市町村と重層的な相談支援体制を構築していく必要があります。また、相談支援員像としては、人の抱える課題は多様でして、社会の変化で課題の現れ方も大きく変化していくものと認識し、課題を受け止め、



寄り添い、地域への接点をみつけ、広げていく役割を担っています。そして、私達受け入れる側も、その多様性を理解し担保できる環境を整備することが必要かと考えます。更には、チームでのアプローチは忘れてはならない大きなポイントと考え、事業を展開していきたいと考えます。

富津市富津地区地域包括支援センター

悩む人の相談



管理者 花澤 光洋

最近、巷を賑わせている野田市の児童虐待の事件があり、また自分自身も相談業務に携わらせて頂いている身として、身につまされる思いをしています。どうしてこうなってしまうのか? どうしたら救い出せることができたのか? など、自分自身への問いかけが果てしなく続いています。

富津市富津地区地域包括支援センターの平成三十年四月から十二月までの総合相談支援業務の相談件数(新規)合計一五七件となっており、昨年のすべての相談件数の合計が一五三件であることから昨年末の時点ですでに上回っている状況にあります。この中に、少なくともありますが虐待に関する相談も含まれています。

こうした経緯もあることから新年度の始まりという事もあり、今一度自分自身の相談業務を振り返りたいと思っています。相談業

務は、『援助する仕事』です。相談者の状況や要望を聴くのが入口（インテーク）であり、ここにおいて心の問題を扱う事から傾聴やカウンセリング技術が高く求められます。この段階では、相談者が抱える問題を把握したり、整理するのが目的となっています。

次の段階では、問題解決に向けての具体的なアドバイスや他機関との手続きや調整・連絡などがあり、相談業務における比重を高くしています。

『援助』の一環として相談業務があり、相談に基づいて様々な問題解決や援助のための手続きを行うのが相談員の役割であると考えています。また相談業務は『援助』の一環であることから、「悩む人の相談に乗ってあげたい」という真摯な気持ちが大切であるとも思っています。

『援助者』である立場を自覚し、日々、高い専門性を求めていくことを再び認識し、相談業務が重責を担っているのだということも心に留めて於きたいと思います。重責につぶされたいよう自分自身の心も常に整えておきたいと考えています。



児童養護施設 望みの門かずさの里 就いて十二年の歩み

家庭支援係長 荒井 久美

かずさの里に入職してすぐ感じたことは、子どもたちの性質が昔とはだいぶ変わっていること！私は他施設で子どもたちと過ごした経験があり、どうしても昔と比べてしまいましたが、幼児さんが、職員に対して「○○ばーか。出てけ、出てけ」と歌っており、『素直で従順』な幼児さんのイメージが崩れました。果たしてやっつけていけるかな、というのが最初の印象でした。発達障がい・高機能障がい・ADHD・アスペルガー症候群：昔はそんな言葉はなかったので意識せず関わっていましたが、ただの「親代わり」ではなく専門職として学ぶことがたくさんありました。

虐待待児童や発達に課題がある児童の増加で専門性も求められますが、今はそれに見合った職員の配置や生活環境が必要だと感じています。職員の配置基準が見直されたものの、人材確保に苦慮し、それさえも満たされていないのが現状です。「人材確保・育成」が今一番の課題です。

昨年は「新しい社会的養育ビジョン」が出され、児童養護に関わる者すべてが驚き戸惑いました。施設での集団養育は減らし、里親への委託を進めていく方向。施設でフォスターリング機能を設け、一時保護やレスパイトも

考えていかなければならないとのこと。現実的ではない施策で、子どものために何を一番優先するべきか：子どものための暮らしを考えて判断していきたいと考えます。

開設当時幼児だった子どもが今高校生です。小規模グループケアを始めて子どもとの距離が近くなった分、関係性に悩むことは増えました。ぶつかり合い悩む中で更に距離は縮まっていると信じて踏ん張っています。この三月で卒園生を二十名送り出しました。そして今感じているのは、施設の暮らしとのギャップが和らぐよう、自立に向けての支援を見直したいということ。苦悩を背負って施設で暮らしている子どもたちではありませんが、ただ温かい環境を提供するだけではなく、自立して生きていく力をどれだけ身に付けるかが大切です。施設で温まり過ぎて、社会に出てから苦労する子を見てきたからです。

また、入所している間に子どもたちの生い立ちを整理・共有しておくべきだと感じています。重い荷物を背負って入所し、背負った荷物を少しでも降ろして退所できるように支援したい。



抱えた苦悩も人に語れて共有できることで、一歩前進・前向きになれると思います。

乳児院 望みの門方舟乳児園

年年歳歳花相似 歳歳年年人不同

施設長 井本 義樹

年越しを迎え、梅、桃、桜の花が順番に咲く姿を見ると、二十代前半の頃に出会った、劉廷芝（希夷）の漢詩、「代悲白頭翁」の一節である「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」が頭をよぎり、この漢詩を読み返す機会に恵まれます。この漢詩と出会った当初は、何とも儚げで切なさを感じる中に、時の流れの現実味を覚えたことをよく覚えています。漢詩の内容は題名通り「おじいさんに代わって嘆く」であり、「気づけば、あっといふ間に齢をとってしまった。若者よ、君たちもすぐにそう後悔するぞ。時間は無常だぞ。」というような内容ですが、何度か読み返しているとその度ごとに、感じ入る箇所が変わってくることを覚え、古人の感性の豊かさ、漢

詩の面白さに触れ、楽しい時間を過ごすことができる季節と思っています。



平成二十八年の児童福祉

法改正、平成二十九年には「新しい社会的養育ビジョン」の発表、社会的養護が必要な利用者をとりまく環境は大きな変化を見せ始め、社会全体が権利主体者である利用者とその環境に対して、大きく変わろうとしているように感じています。その変化に因應するためには私たちが何をすることができ、何を目指すのか、施設長としてというよりも、いち社会福祉事業の従事者として真摯に向き合い続けていきたいと考えています。

末筆になりましたが、当施設は本年四月をもって開園十周年を迎えることになりました。当施設を支援して下さった様々な方のご尽力に対して、この場をお借りして御礼申し上げますとともに、これからも変わらぬご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。あっといふ間に過ぎた十年でしたが、今後も皆様のお力をお借りしつつ、日々変貌する社会のニーズに則した社会的使命の遂行、乳児院という社会福祉事業の存在意義を職員とともに考え続け、子どもたちの明るい未来をつなぐために励みたいと考えます。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家



管理者 井本 千鶴

優しい春の風と共にたくさんのお花が咲き始め、寒さに縮こまっていた身体も心もほぐれるあたたかな季節になりました。ピーターパ

ンの家は七年目の春を迎えました。地域の皆様、関係者の皆様のご理解、ご支援のおかげで、多くの方にご利用いただけていること、大変感謝しております。

更に今春からは、富津市役所に出張所を設置させていただく運びとなりました。今まで以上に多くの方と出会うことを期待して、ワクワクしています。これからも多くの地域の皆様と出会い、一緒に子どもたちの成長の喜びを分かち合い、笑顔の時間を作っていきたいと思っています。

ところで、みなさんは最近、いつ笑ったか覚えていますか？笑いには、ストレスの解消や自律神経のバランスを整えて、幸福感を増す効果がある、と言われていました。また免疫機能を向上し、様々な病気を予防・改善する効果や鎮痛作用、筋力アップ等の効果があるという研究もなされています。嫌な気分の中でも、鏡の前でにっこり笑うと不思議なもので気分もちょっと明るくなります。人は楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しいのだ、とも言います。ぜひみなさんもキュッと口角を上げてみてください。ピーターパンの家で、



たくさん笑ってたくさんさんの福と一緒に招きましょ。職員一同お待ちしております。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園

木下記念学園の近況報告

園長 西山 信男

まもなく、望みの門木下記念学園は開設三年を迎えます。法人設立以来、これほど種々の問題を解決できずにいる施設はなかったのではないかと、深く反省しています。

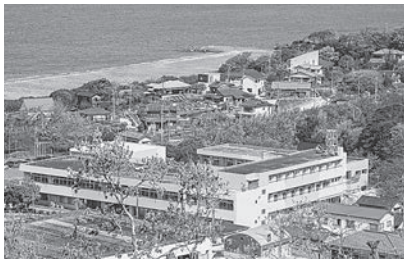
これまで十九名が入所し、五名が自宅復帰や他児童施設への措置変更で退園しています。現在は十四名の子ども（男子九名、女子五名）が生活しています。開設時から入所している児童は四名になりました。子ども達は、言葉で自らの意思を伝えられるようになり、生活リズムも安定し、毎朝元気に通学して、充実した日々を過ごしています。華奢だった体も規則正しい食生活で、逞しく成長しました。とはいえ些細なことで気分を害し、トラブルになることもあります。職員と振り返りを毎日行うことで、あとに問題を持ち越さないようになりました。昨年十月より、医務監として古閑啓二郎先生に着任いただいたことによって、医療・教育・心理と福祉が一体となって子ども支援が出来ることの安心感が生まれ、それが子どもと職員にしっかり伝わり、現在に至っていると思います。

振り返ってみると我々職員は、退園した子

ども達に教えられたことが、多かったと思います。試し行動、暴力・破壊行為・集団逃走、自殺企図、心の不安定。そのたびに右往左往し、軸足がしっかりしていませんでした。そのため、当施設を離れた職員は十人以上になりますが、それぞれ「やる気」をもって木下記念学園に臨んだ強者ばかりでした。今なら、きっと一緒にあって、子どもの「安心、安全」を考えた生活指導、が実践できただろうと残念に思います。

また何より上総湊の地には、望みの門かずさの里・方舟乳児園・富士見の里が既存し、その実績から地域からの無言の圧力もなく、協力的な地域の皆さんに受入れられ、地区行事の時には連絡があり、積極的に参加が可能になっています。感謝の念に堪えません。

好条件が揃っているにも関わらず、児童の入所が捗らないのは、受け入れ態勢に不備・不安があると気づき改善をしました。女性職員は、緊急時対応の発信機を所持し、落ち着いた子供のために、クールダウンするため、の静養室を用意、古閑先生に、いつでも相談ができる連絡網を作成しました。また児童相談所に対しては、一時保護委託を行うなど児童の現況把握をしっかり



り行い、退所後の進路も確認してから、入所受入れを行うようにしました。

このように試行錯誤を繰り返しながら、一歩一歩施設運営に必要な設備・環境を整えつつ、前進しています。子ども達の「笑顔」のために、職員一同頑張っています。今後ともご理解、ご協力を宜しくお願い致します。

編集後記

理事長が法人構内に住まわれて一年経った。「ひとりの命を大切に」の巻頭言は、児童の虐待死というまことにおぞましい、かつ悲しい社会の現実の中で、頂門の一針とでも云うべき私たち職員にとり肝に銘ずべき内容である。さて春は三月弥生の候ともなれば、小中学校では半ばには終業式、そして卒業式が行われる。法人では「かずさの里」から五名が卒園した。その中の一人は入園した年のクリスマス祝会に職員に抱っこされていた情景を思い出す。夫々大学に進学、就職していく、旅立ちを心から祝いたい。新生舎では本年四月で開設二〇周年を迎える。当初三名が現在四十一名の皆さんとなった。目下記念事業に取り組んでいる。さて、新年度は法人にとり、望みの門学園の移転新築工事を軸に大きく充実発展が期待される。今までは「湊」地区であったが久方振りに法人発祥の地である「富津」地区の事業となる。成果を祈りたい。

(Y・I)